



KARIBIB

の回想



2023 年度 1 次隊/数学教育/渡辺 崇人

2025 年 8 月 20 日 Vol. 35

「前編」

さて、ようやく 2025 年の出来事に突入です。
今回紹介するのは、帰国前最大のイベントといっても過言ではない来ナした日本人とのコラボイベント
AFRICA ART PROJECT in NAMIBIA
です（写真 1）。

これは、JICA ボランティアの OB で 2017 年
～2019 年までモザンビーク共和国に派遣されて
いた石田 恒平さんによる企画で、東京造形大学の
博士課程で行っている「アートと国際協力」をテー
マとする研究の一環として、アートの視点で何か課
題解決に向けた取り組みを一緒にできないかと連絡
をいただいたことがそもそもの始まりになります。

ただ、この連絡を受けた当初は正直(´・ω・`)?
という印象でした。というのも、「“アートの視点
で” って何ができるんだ？なんなら、国際協力から
最もかけ離れた分野じゃないのか？」という感想し
かもてなかったからです。

しかし「人生はすべてタイミング」とはよく言っ
たもので、この連絡をいただいた時にちょうど
[Vol.25](#) で紹介した「日ナ平和展」で日本へ送付す
るためのメッセージアートを制作しており、自身が
芸術分野に大変疎かったため、“その道の人に何かアドバイスを貰えればなー(・▽・)”
と軽くご連絡を差し上げたことで連絡を取るようになりました。ただこの時は、この出会
いが先ほどの固定観念を後に大きく覆すことになるとは知る由もありませんでした。



写真 1：イベントのポスター

元々打ち合わせの中では「配属先では美術や音楽、
体育といった情操教育が放置されているから教員も巻
き込んでモデル授業を一緒にやりましょう」という話
でまとまっていた。しかし 2025 年 2 月 8 日に
ナミビアの初代大統領である Dr. Sam Nujoma が逝
去され（写真 2）このことを受けて、全公立学校を



写真 2：学校に設けられた Dr. Sam Nujoma
の祭壇

管轄する教育省より「今回のご逝去に伴い、彼に哀悼の意を捧げるためにアートや演劇、詩の朗読等彼に関わる何かしらの創作活動を行って欲しい」と各学校に通達がありました。このことで何かできないかと再度相談したところ“だったらナミビアは砂漠が有名だから、カリビブにある砂を使ってベニア板に彼の肖像画を描くサンドアートをやってみよう！”と来ナ10日前にも関わらず計画を変更することに。臨機応変なのが協力隊らしいと思う反面、本当にこんなことできるのか・・・？と当時は完成図が想像できませんでしたが、話していて心が踊っていたことは覚えています。



写真3：敷地内の砂

写真4：工務店のカラースプレー

写真5：中華ショップの合板

ということで、そうと決まれば材料の調達です。砂はそんじょそこらにあるため、簡単に手に入ります。カリビブの砂の特徴は、写真3のように元から石灰を撒いたような色をしており、そのため日中はサングラスをしていないと自動車のハイビームを受けているかのような照り返しに襲われます。また、[Vol.29](#)や[世界日記#09](#)で紹介した通り、こちらの人はカラフルなものを好むため、砂を色付けすることに。幸い、カリビブには工務店があるためカラースプレーも簡単に手に入りました（写真4）。そして、肝心の板がなかなか見つかりませんでしたが、カリビブに4つほどある中華ショップの1つで縦120cm×横240cm、重さ10kg超の合板を見つけ、1枚7,000円近くしたものの手に入れることができました（写真5）。買い出しの間、2年近くカリビブにいながら初めて知ったお店も色々が見つけることができ、新たな開拓に繋がりました。

調達の次は下準備です。授業だけでは間に合わないため、いつもの日本語クラスの生徒＋有志の男子生徒で休みを返上して作業に取りかかりました。砂から小石を取り除き、スプレーで色付けした後に（写真6）天日干しします（写真7）。その際、ペットボトルや段ボールの箱といったゴミとして捨てられていた物もできるだけ活用することを心掛けまし



写真6：砂のろ過と色付け作業

写真7：天日干し作業

写真8：呼吸するように踊り出す

た。作業では、成人のタバコ休憩と同じ頻度で生徒が歌い、踊り出すためここはやっぱりアフリカだなと再認識させられました（写真8）。本当に、いい表情をしていますね(^-^)



写真9：下絵の途中

写真10：完成した下絵

写真11：お菓子パーティ

下絵も同時並行で進めます。写真を見ながら肖像画を描いていき（写真9）、最後に完成したものが写真10になります。見た時は、“え、なんで鉛筆だけでこんなに特徴を捉えられるの？なんでこんなに作業が早いのか？”と美術の成績が2の自分には全く理解できませんでした。ただただその凄さに驚愕していました。すべてが終わった後は、お疲れ様ということでお菓子パーティを（写真11）。こちらではほぼすべて用意していましたが、日本語クラスの一人の子がせっかく日本からゲストが来るからとモパネフォーム（※閲覧注意）を持ってきてくれました。ただこちらに来て分かりましたが、生徒の中にも見た目から嫌いな子が少なくないんですね。ということで写真11の女の子たちは「え、それ本当に食べるの？」とのけ反っている所です（笑）。今回は下準備までの様子を紹介しましたが、童心に帰ったようで本当にワクワクした時間を過ごせました。【後編】では本番で並行して取り組んだ別の活動の様子と併せて、完成した作品をお披露目します！

ちょこっと余談

Dr. Sam Nujoma とナミビアで故人を追悼する様子について紹介します。



(Bank of Namibia より)



Dr. Sam Nujoma は上述した通りナミビアの初代大統領であり、当国が独立するまでの約30年間、独立運動を率い、最初の国家指導者として新しい国の土台を築いた中心人物だったことから“建国の父”とも呼ばれています。

そのため、その功績を称えて、上の写真のように肖像が紙幣に用いられ、90歳を祝うための記念硬貨が発行されたりしています。

またナミビアで故人を追悼する様子ですが、特に親しい人だと日本と同じよう悲しみます。アフリカだから終始明るいということはありません。その後、その人の生涯を称えるために歌や祈りが捧げられ、埋葬されます。またこれは場所やケースで大きく異なりますが、徐々に明るい雰囲気になり、別の歌を口ずさんだり右のように写真撮影を始めたりすることが身近では多かったです。



次回：AFRICA ART PROJECT in NAMIBIA【後編】です！